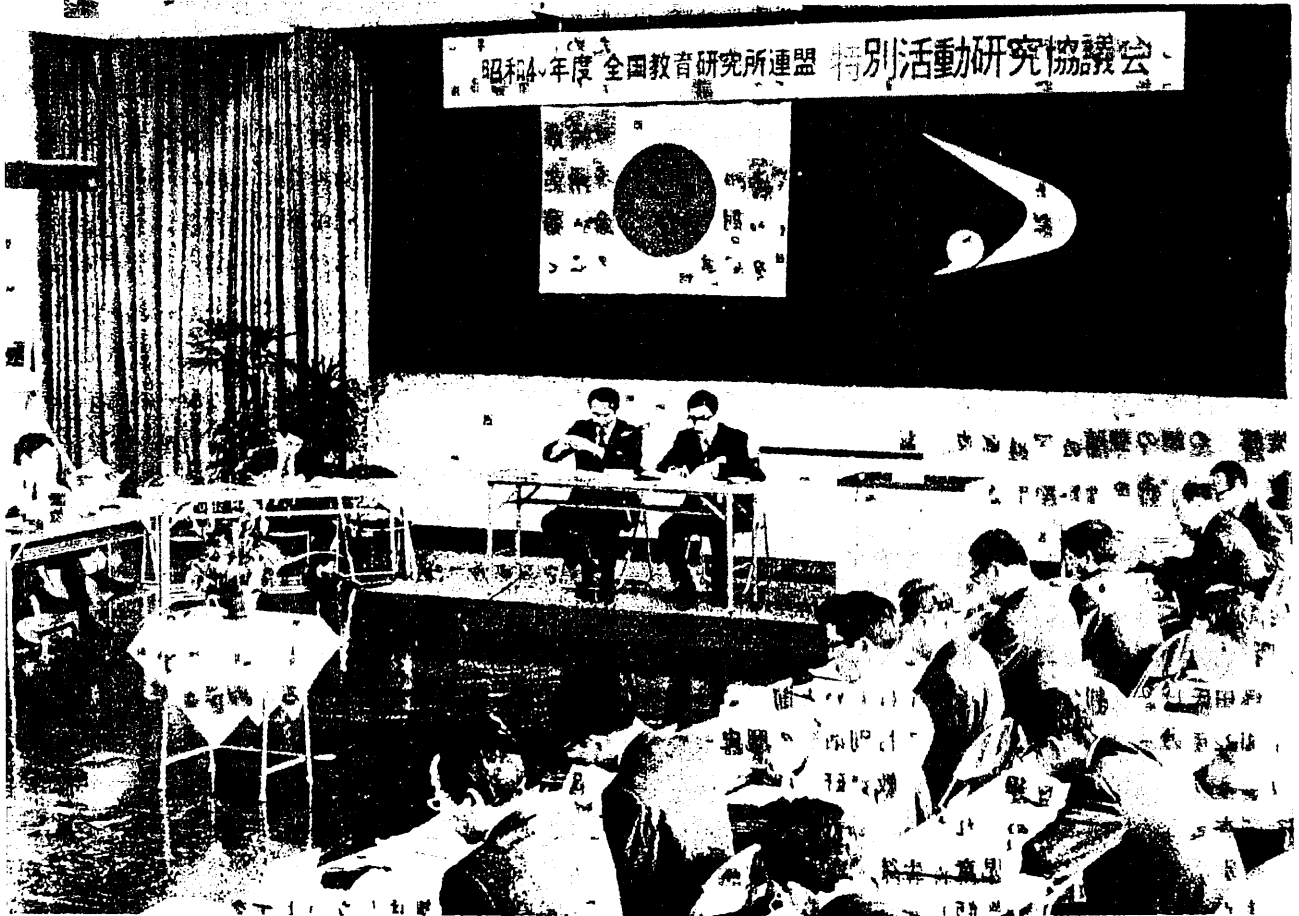


# 教育センターだより

## 目 次

全教連特別活動研究協議会から	1
教育相談研修会から	4
研修講座をふりかえって	5
研修員の報告会を終わって	7
ア・ラ・カルト	8



学級指導と学級会活動を区別するあまりに「学級指導は教授的方法をとるものであり、学級会活動は助言的方法をとるものである」とか「学級指導は教師中心であり、学級会活動は児童・生徒中心である」などのように機械的に対峙される傾向がある。

学校教育を貫く機能として、充実強化が求められている生徒指導は、学級指導にとどまらず児童活動・生徒活動の中に浸透することによって、その質を規定するはずである。

現に、生徒指導を基礎にして学級指導・学級会活動・道徳などを一本化して「学級の時間」として扱っている実践例も報告されている。

ここで、私たちは学級指導と学級会活動との関係をどのようにとらえるかという問題に遭遇する。

私は、学級指導も学級会活動も子どもの自主性を育てるという点ではただ1つの指導ととらえるべきでなかろうか、と考える。

子どもの自主的活動を促し、その結果として教育的価値を実現して行く。つまり子どもの学習目標と教師の指導目標とを統一し、子どもの自主性をひき出しながら、主体的思考を含む自主的活動という教育的価値を実現していくことではなかろうか。その上で、教師

## 学級指導と学級会活動

国立教育研究所

藤 田 昌 士

の指導のさまざまな局面の問題として、学級指導と学級会活動を位置づけていく必要があるのではないか。つまり両者は基本的にはただ1つの指導であり、自主性を育てる過程にはどのような指導の局面があるのかという問題として検討していく必要がある。

(全教連特活協議会の講演より。文責編集部)

## 特別活動をとおして子どもの自主性をどう育てるか 教師の指導性と児童・生徒の自主性とのかかわり合い

本年度の全国教育研究所連盟・特別活動研究協議会が、10月3・4・5日の三日間、当センターを会場に開かれた。32都道府県の36機関から58名が参加し、「教師の指導性と児童・生徒の自主性とのかかわり合い」を中心に熱心に協議が行なわれた。

問題提起者による発表とそれをもとにしての協議はこれまでの研究に反省の材料を提供するとともに、今後の研究・実践に多くの示唆を与えるものであった。

また、問題提起者だけでなく多くの機関から討議資料が提出されたことは、協議の中味をより豊かにするものであった。

なお、最終日は男鹿半島の視察を行ない、大棧橋を中心とする景観・珍しい温泉による石灰岩層、男鹿水族館での鯛の養殖・マリンガールによる餌付け等を見学し好評であった。

### 子どもの自主性は教師の力で育てられる

開会式に続いて、国立教育研究所の藤田昌士氏が、「特別活動の現状と課題」と題して講演を行なった。

藤田氏は、批判的に受けとめてほしいと前置きし、昭和22年の「自由研究」に始まる特別活動の歴史をふりかえり、昭和26年と49年に国立教育研究所が実施した調査をもとに話を進められた。

特別活動においては、児童・生徒活動の指導と学校行事などのように学校（教師）が意図的計画的に与える指導とを区別して考える傾向がみられるが、学校教育を貫く機能とされる「生徒指導」を基礎に、両者は統一的には握されなければならない。

学級指導と学級会活動については、両者を機械的に対峙させる傾向があるが、子どもの自主的活動を育てる指導という点で統一してとらえ、両者の差異は指導の局面の問題として考えていかなければならない。

クラブ活動は「教養を身につけるため」から「学校生活を楽しむため」に、リクリエーションとしてとらえる傾向が目立っている。クラブ活動は自主的活動であるとともに文化的活動としての性格もあるという点があいまいにされている。アメリカのフリケルが「課外活動は課程活動から流れ出て課程活動にかえり、それを豊かにしなければならない」と言っているが、今日の教科と教科外—特にクラブ活動に、このことばがあてはまるのではなからうか。

児童会・生徒会の活動では「活動の時間が足りない」「役員・委員だけの活動になりがち」というような指導上の問題もあるけれども、われわれが児童会・生徒会を組織し指導するのは、一定の教育目標を達成するために、学校のある種の問題に子どもたちを参加させたり、意見を述べさせたり、彼ら自身の計画で実行させることが、教育方法として有効だからである、ということをしっかりおさえることが重要である。この場合、現在の子どもの発達水準からみて、どういう範囲のことがらを子どもに投げかけ、取り組ませることが効果的なのか明確にする必要があるのではないか。

### クラブ活動の問題点

千葉県教育センターの宮下清氏は、過去2か年の県内小・中学校を対象とする調査をもとに、「クラブ活動の実践上の問題点」として、つぎのような問題提起を行なった。

1. クラブ員の協力を高めるために、初期の集団化の指導が大切である。
2. 自治的活動を助長するために、クラブリーダーの活躍が期待される。
3. 民主的な話し合いに基づいて、クラブの活動計画と活動方法が決められることが必要である。
4. 施設・設備の不足は難しい問題だが、需要が特定のものに集中しないようクラブ数と人員を調節することも1つの方法である。

クラブ活動については、それぞれの県でいろんな試みがなされているとともに、多くの問題をかかえていることが、協議の中でも明らかにされた。いくつかを拾ってみると、

○クラブ活動と部活動を一本化している学校が各地にあるが、概して小規模校では子どもたちが満足し、大規模校には不満な子どもたちが多い。

○クラブ活動は楽しいと言う子どもでも「授業から解放される」とか「遊べる」という意味で、「もし自由であればどうするか」ときけば「家へ帰ります」と答える子どもが多い。

○クラブは技術よりも人間関係だということで、文化系の教師は体育クラブを、運動の得意な教師が文化クラブを担当するというところで成功している学校もある。

○教師の中に「忙しいから」と出席をとるだけで帰る教師がいると、子どもたちの意欲は極端に低下する。

### 学級指導の構造化は全員で

「学級指導の指導計画と指導過程」については、当センターの三浦万蔵指導主事が、中学校における自分の体験と県内の若干の中学校の実践に基づいて、つぎのような問題提起を行なった。

学級指導といえば、それだけに目を向けてしまいがちであるが、学校の教育目標の具現のために、教科・道徳・特別活動のそれぞれの領域がどのような役割を持つのか、ということをもまずはっきりさせる必要がある。

指導計画の作成は、まず何をその軸にするかが大切ではなかろうか。たとえば、年間の学校行事を軸にして、学級指導や学級会活動を構造化するというのも1つのやり方ではなかろうか。

計画作成の具体的な作業はまず題材の収集である。題材の模索という大切な段階で、あとから考えると無駄が多いと思われるけれども、全職員でできるだけ多くの題材を集めなければならない。

つぎは構造化の過程である。ここでは、ひとりひとりの教師が課題をもつということが必ず出てくる。たとえば2学年担当の教師がある題材をとり上げる必要を認めた場合、それが1学年とどのようにつながり、3学年にどのように引継がれていくのかということである。このようにして、3年間を見通した題材の構造化が進められる。

最後は学年内での構造化の段階で、実施可能な細案の形でまとめられることになる。

このような過程を通して、教師の指導のあり方・指導内容についての意識化や共通理解がはかられていくのである。

学級指導は適応指導が多く、生徒の心理的なものに訴える内容が多いから、授業に入る前から生徒の「意識化」の過程が始まっていなければならない。生徒が自然に気がつくような状態を、教師がつくってやらなければならない（よく教師の指導性が強くなれば生徒の自主性がおさえられ、生徒の自主性が伸びると教師の指導する場がなくなってしまう、というようなことが言われるが、学級指導はもちろんのこと学級会活動においても教師の指導は必要である）。

そのつぎに、生徒が自分の問題として深くつっこんでいく「追求」の過程があり、そこで一定の満足感が

得られて、つぎの時間なり題材に「発展」的につながっていくのである。

上のような指導の過程で教師に期待されるのは、受容的共感的態度であり、「意識化」や「追求」を援助できる能力である。これがいわゆる教師の指導性の問題で、適切な生徒理解に基づく教師と生徒との心の触れ合いを深めるとともに、生徒の自主性を高めることにもつながっていくのである。

協議では、特別活動の評価が問題になったが、教師の指導の評価と子どもの変容の評価を分けて行なう方法や記録に基づいて両者をあわせて評価する方法と子どもの集団の評価にソシオメトリーをベースにする方法などいろんな試みが紹介された。

### 学級指導と学級会活動の統合を

大分県教育センターの藤井義昭氏は、昭和26年と46年の調査研究に基づいて「学級の時間としての位置づけを」という、つぎのような問題提起を行なった。

学級指導と学級会活動の関連を考える際、まず両者の相違が問題とされる。たてまとしての両者の違いはたびたび論議されてきたが、具体的な実践の場では本当に相違があるのだろうか。子どもが問題を出せば学級会活動で、教師が言い出せば学級指導と考えている教師が案外多いが、両者を区別することが必要なのだろうか。特に子どもの側から見ると、どちらも学級を主体にした活動であって、両者の差異はない。

特別活動の基本的な性格としての

1. 集団の活動である（集団性）
  2. 子どもが何らかの活動をするものである（自主性）
  3. 教師と子どもの触れ合いがある（コミュニケーション）
- の3つをおさえさえすれば、「学級の時間」とした方が現実的でもあり、効果も期待できるのではあるまいか。

この問題に対しては、「たとえば給食指導・安全指導のように、子どもの自主性を待ってはならない、どうしても教師が前面に出て指導をしなければいけない場合もあるのではないか」と疑問も出された。

しかし、「教師の指導が中心になる内容と子どもが話し合いをしたり仕事を分担しあう内容とははっきり分けられるとは限らない」とか「子どもが自主的になるのを待ってられないと言うとき、教師の指導性と子どもの自主性を相反するものと考えているのではないか。この場合、教師の指導は押しつけ、子どもの自主性の尊重は放任になってしまう」という反論もあった。

## 教育相談のあり方をめぐって

——東北・北海道地区教育センター協議会、教育相談研修会から

秋も深まってきた9月19日（木）から2日間、東北・北海道の道県立教育研究所・教育センターの、教育相談関係担当者の研修会が本センターで行なわれました。参会者は全部で17名という、ささやかな集まりでしたが、教育相談に関する研修・研究・奉仕の各活動についての情報交換・協議・問題児の事例研究などが活発に展開されました。以下、その概要をお伝えいたします。

### 研修の積み重ねが必要

教育相談は、教師が知識を身につけるだけでは成功しない。子どもをより深く理解しようとする態度と、鋭い感受性とが必要である。そのような態度や感受性を身につけるには、1回だけの研修では不可能である。そ

のような認識で、たとえば青森県では、三年間毎年同じ受講者で、経験の積み重ねを期待した方式（3年サイクル方式）をとっている。

秋田の場合も、カウンセラー養成講座（初級）からカウンセラー研修講座（中級）へのわたりを期待した研修方式を持っている。



### 相談活動が盛んな中学校

#### 小学校・高校はこれから

学校での相談活動について、各道県共通している点は次のようなものである。

1. 校種別にみると、組織面からも、実際の活動の面からも、最も進んでいるのが中学校で、小・高はこれからという感じが深い。
2. ただし、同じ校種間にも格差が大きい。その点からみれば、小学校や高校では教育相談が育たないと思えるのは早計と思われ、独自の活動へのくふうが望まれる。
3. 相談活動や事例研究のための時間の確保がむずかしく、共通理解の必要性を痛感しながらも実践できない学校が多い。

また、活動の中心となる生徒指導主事（秋田の場合の名称）の授業時数が問題となり、北海道では、中学の場合最少12時間ふつう15時間という報告があった。

小学校での相談活動は、授業自体がカウンセリング的であるような工夫をするのがよく、問

題児指導は遊戯治療の考え方をとり入れた指導を中心とするべきだ、との意見が参会者の共感を呼んだ。

### センターでの相談活動

#### — 本県は奉仕主体型 —

センターでの相談活動は、道県により、いくつかの傾向に分かれている。

北海道は、相談者数を絞り、少数の子どもたちを対象に研究を進める、いわば研究主体型という傾向を持つ。

宮城は、直接子どもと接触せず、教師への助言を中心とした、いわば教師主体型。

また、青森・岩手・福島は、可能な限り多くの子どもたちと接触し、その治療に当たるといふ、いわば奉仕主体型ともいえる。秋田の場合もこの型に属する。

### 来談の多い「性格・行動」問題

#### — 本県はさらに「身体・神経」問題も —

各県とも「性格・行動」問題での来所が多く、「進路・適性」「学業」問題は少ない。

本県の場合もあてはまるが、本県では夜尿車酔いのような「身体・神経」問題の来所が他より多いようである。

共通した研究対象は「登校拒否」を中心とした情緒障害児であった。

## 今年度の研修講座をふりかえって

### 多彩な経営研修

#### 経営研究室

昭和45年以来、約5,000名の先生方を迎えたことになる。そこで今年度の講座実施状況を紹介してみよう。

#### 1. 学校経営研修講座

##### (1) 新任教頭・主事 (小・中・高)

教頭法が制定され、使命感を強く研修した。

##### (2) 教務主任 (小・中・高)

小、中は前後期の研修、特に後期は受講者による運営委員会で講座内容を検討して研修した。

#### 2. 学年学級経営研修講座

##### (1) 学年主任 (小・中)

学校経営における学年学級経営の重要性、学校組織の中での学年主任の役割等々を研修した。

#### 3. 教職教養研修講座

##### (1) 新採用教員 (小・中・高)

後期は学校の一日の全ぼう参観を中心に、鷹巣小、鷹巢中、能代一中にわかれて研修した。

会場校のあたたかい配慮に感謝する次第である。

##### (2) 新採用事務職員 (小・中・高)

##### (3) 新採用養護教諭 (小・中)

ともに職務の重要性を広い視野から研修した。

#### 4. へき地教育研修講座

##### (1) 複式学級新任 (小)

協和町大盛小の参観、「複式学級の学習指導」資料の活用法等を研修した。

#### 5. 定時制教育研修講座

##### (1) 分校主任 (高)

定時制教育の問題解明のため協議中心に研修。

#### 6. 学校評価法研修講座

##### (1) 校長、教頭 (小・中・高)

希望講座であり、学校評価にかかわる問題を協議し、班ごとに基準案作成等の演習をした。

### 受講者の意見をとりにいれて

#### 教科研究室

学習指導要領の改訂に伴い、教師自身が研修しなければならない多くの課題がある。例えば、数学の内容、音楽における日本の音楽の分野などである。教科により、取り上げ方は異なるが、与えられた研修の機会が

有意義に活用されるよう実施しながら49年度事業は終りに近づいてきた。50年度は、受講者の意見などを参考にして、さらに有効適切な方途をさぐっていきたい。

**国語科**—小中高とも文学教材を領域とした教材研究学習指導法を内容とし、授業研究と演習面を重視する講座にした。なお中高では古典を中軸にし、中世文学の作品研究を充実させ、中央講師の講演も行った。

**社会科**—9月9日から3日間、高校日本史の「文化に関する指導事項の重点的取り上げ方」を中心に講義演習・研究協議を進めた。受講者の発表内容の質が高く、積極的な研修態度が印象的であった。

**算数・数学科**—算数・数学教育の現代化を支えている、集合・論理、関数、確率・統計などの基本的内容と、それらの教材内容の扱い方、および、その指導の重点について先生方が熱心に研修を行なった。

**音楽科**—●小学校…鍵盤和声、リコーダー・フルートの奏法実技、リコーダーを中心としたアンサンブル曲の編曲、合奏実技を行った。●中学校…尺八・三味線の奏法実技、「小鍛冶」指導法の研究発表など。

**図工・美術科**—小学校は11月に行うが、内容は紙工作を中心としている。中学校は6月に木版画の実技研修を行い、参加の諸先生の力作を教育センター美術室に展示中です。おいでの節には自由に鑑賞のほどを。

**英語科**—中学校2回(40名)、高校1回(20名)のLLを中心にした講座を実施した。本年度講座の特長は「中高の連携」について取り上げ、授業参観によって両者の理解を深め合ったことである。

### 核心は子ども理解

#### 教育相談研究室



カウンセラー養成講座風景

◆ 特殊教育関係2講座、進路指導関係2講座、生徒指導関係3講座、カウンセリング関係2講座、それに、心理検査技術研修講座1講座が既に実施済みとなった。なお、このほかに随時研修講座として、能代・山本生徒指導・進路指導研修講座と

大曲市教員研修講座(教育相談部門)に協力した。

計画講座のうち、昨年度の受講者から申し送りのあった「生徒指導研修講座」と「高校進路指導研修講座」については、本年も中央講師を招き、講座内容の充実を図った。招へい講師は下記のとおりである。

- 小学校生徒指導 千葉大 坂本昇一教授
- 中高生徒指導 東北学院大 村田良一教授
- 高校進路指導 東大大学院 新井真人研究員

なお、本年度新設のカウンセラー養成講座への受講希望が非常に多かったことで、やむをえず30名の方に受講してもらった。

- ◆ 全教連東北地区発表会で木村指導主事が研究成果を発表、9月3日岩手県教育センターでの発表要旨は次のとおりである。

高校1年生の保護者の要求と高校1年生の受け止め意識に関して

- ア. ずれ、イ. 一致、ウ. 受容と拒否、などについて、(以上はS48年度研究紀要第5集より)
- エ. 保護者の要求の因子分析の結果について、

さかな・いし・ひかり・かきませ  
理 科 研 究 室

女教員理科研修講座「フナの解剖」より

ひときわ大きなおなかから、腸にからんで、白く、ひらべったく、まことに長い異様な“臓器”が見つかった。いくら、テキストの図と照らしてもわからない。——脂肪のかたまりだろう。——精巣らしい。——寄生虫かしら。と、受講者・講師いっしょになってケンケンガクガク。参考書をうず高く積んで、その正体がカイツブリニシヨクジョウチュウと判明したときは、受講者のいなくなった日暮れどきであった。

岩見三内コースはすばらしいルート

野外観察岩見三内コースは、4kmという距離の中で地形・地層・岩石について基本的な観察事項が連続するほか、高度な推論を要する事象まで含み、小・中・高それぞれに応じた巡検ができるすばらしいルートであるという好評を得た。

高校理科研修講座(物理班)「光電効果」より

従来、この現象をはっきり示すには、光電管等の光電子が特に飛び出しやすい器具を用いていた。

本講座では、はく検電器に金属のをせ、それを負に帯電させはくを開かせてから光を当てる方法をとった。このとき、はくが閉じることによって、金属から電子

が飛び出したことがわかる。物理IIの内容であるが、Iでも増加単位分で扱えそうだとのことであった。

簡易マグネチックスターラーの自作

中学校の中和実験で、かくはん装置があれば非常に効率的であり、埋振でも取り上げられているが、市販品は高価である。しかし、市販プラモデル用モーターの軸に磁石(同じ面にN・Sのあるもの)を接着したものを使用すれば、材料費約500円で自作できる。

理科教育講座等で実験した結果、十分使用できるということであった。詳細は、理科研究室化学のほうに、

栽 培 領 域 を 実 施 し て  
技 術 家 庭 研 究 室

今年度は、技術・家庭科実技研修講座(男子向き)について、4日間ずつ、3回実施した。4日目は、共通研修として現場から要望の多かった栽培領域をとりあげた。午前中は、秋田県農業試験場をおとずれ、園芸部の花き、野菜等の温室栽培を中心に見学した。特に冷涼地イチゴの二期作栽培の実際と、着色フィルムを利用したシクラメンなどの栽培法改善試験は、先生がたの興味をひいたようである。場長さんの秋田県農業の将来についての熱のこもったお話も感銘が深かった。午後は、指導課加藤指導主事から栽培領域指導の問題点を中心に、スライドによる説明、学校でも使える簡単な養液栽培の器具の紹介、農薬、肥料の説明、養液の調合の仕方などについて、実物、資料を豊富に用意されての指導は大変参考になったようである。

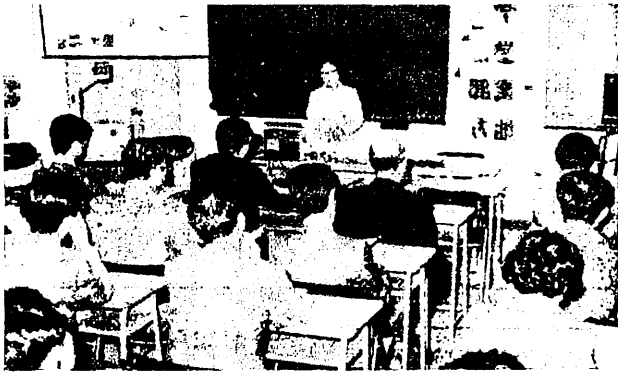


農業試験場見学風景

アンケートから ●栽培については、見学だけでも大変役にたったと思う。午後の講習は最大の収穫でした。来年度もぜひ。なお、キクの電照栽培などとりあげてほしい。●希望がかなえられてよかった。実質的なつくり方の指導も希望したい。用土つくりや心つみの方法等。●栽培指導はむづかしい。3日間くらいやってほしい。etc

## 昭和49年度 研修員研修報告テーマ一覧

本年度の研修員として、5月からそれぞれのテーマを追って熱心に研修にいそまれてきた、16名の先生方が、その成果を抱いて、10月に、めでたく学校に復帰されました。それに先立ち去る9月18日(水)、全県から多くの先生方にお集まりいただいて、センターで報告会が行なわれ、終日真剣な討議が展開されました。報告の内容は、「研修集録」第6集として来春3月ごろ発行の予定です。研修員の先生方の、今後の精進を祈りつつ、ここにテーマをご紹介します。



### 経営研究室

- 湯沢市立坊ヶ沢小学校教諭 菅原 慈郎  
小学校クラブ活動におけるクラブ選択についての一考察
- 平鹿町立吉田中学校教諭 佐々木一雄  
中学校における学年主任の職務に対する意識について — 学年主任のリーダーシップについて —

### 教科研究室

- 比内町立扇田小学校教諭 上杉 直上  
歴史学習に放送教材を取り入れた指導の一考察  
— 小学校6年の社会科(室町時代)を中心に —
- 平鹿町立浅舞小学校教諭 高橋 重行  
小学校詩教材の指導法についての一考察  
— 詩の鑑賞・詩作指導のあり方を求めて —
- 大曲市立大曲小学校教諭 小松 典松  
小学校図工科における彫塑教材の取り扱いについて  
— 系統性をふまえた学年のねらいと題材について —  
— 立像の制作について —
- 本荘市立北中学校教諭 増川 桁  
邦楽鑑賞領域における指導法の改善  
— 長唄「小鍛冶」における指導過程の評価を中心に —
- 県立大館鳳鳴高等学校教諭 最上 隆二  
数学II Bにおける「行列」の指導について  
— 一次変換に重点をおいた指導計画を中心に —

### 教育相談研究室

- 県立平鹿高等学校教諭 森元 章夫  
生徒の自己理解を援助するホームルームの望ましいあり方

### 理 科 研 究 室

- 男鹿市立鹿山小学校教諭 渡辺 忠男  
鉄さびの効果的な生成方法の検討  
— 物の質的变化の追求をめざして —
- 能代市立能代第一中学校教諭 鈴木 健  
細胞での活動を指導するための一考察  
— 原形質流動について —
- 神岡町立平和中学校教諭 佐々木定男  
野外観察指導に関する資料の収集とその活用  
— 土川地域における地形・地質を中心として —
- 県立秋田工業高等学校教諭 佐々木 武  
単振動を主題とした学習指導の一試案

### 技術家庭研究室

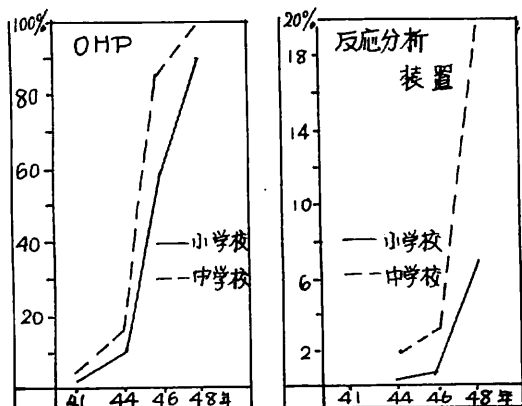
- 鹿角市立八幡平中学校教諭 小林 健夫  
低周波増幅回路の学習指導について  
— インタホンを題材として —
- 組合立羽城中学校教諭 小玉 康夫  
機械のしくみを理解させるためのくふう  
— 軸受を中心として —
- 田沢湖町立生保内中学校教諭 藤田 良子  
中学校技術・家庭科女子向きにおける教材の検討  
— 「食物領域」調理実習における乾物類の取り扱いについて —  
— 「被服領域」被服製作における布のほつれについて —
- 県立由利高等学校教諭 椎名 延子  
被服材料実験を組み入れた製作学習の一考察  
— スカートを中心として —

## ア・ラ・カルト

### 教育機器をめぐって

経営研究室 教育工学研究チーム

県内の小・中・高等学校の教育機器保有状況について、以前から調査（指導課）されてきたが、その中からOHPと反応分析装置の充実過程と、活用上の問題点を当研究チームで分析してみた。下図は保有校率



OHPは、昭和43年文部省が全国に教育機器利用の研究指定校を決めて以来、県内に急速な勢いで設備され、本年2月現在の調査で小中高校の保有効率は、それぞれ89.2%、98.4%、70.5%に達している。また反応分析装置は、OHPよりもはるかに保有校率は低いが、設備経過がOHPの場合と非常に類似し、数年後には、かなり高い保有校率になると推測される。

しかし、教育機器の活用状況について、アンケートから2,3の点をひろいあげてみると①使い方を知らないで使わない。②準備に時間がかかるので使わない。③機器授業では、人間関係が疎外されるから。台数が不足だから使わないというような声があるが、①については、もっと校内研究会や地域の研究会で相互の研さんが必要であろう（本年度も各地区から、当センターに教育機器に関する随時研修が申し込まれ、実施している）。②については、指導は自分の調べたものという考え方を、学年・教科の協同作業で資料づくりや準備という考え方に転換しなければならない。③については、機器を学習に導入することによって、いろいろな効果があることを指摘されている今日、要は実践してみることに。その後改善点や台数の増など検討すべきである。ただ、機器が教師の代行であってはならない。学習の主体者である児童・生徒の実態のは握と、教材内容の分析がなされ、はじめて機器が学習へ正しく位置づけられることを忘れてはならない。

## 昭和50年度事業についてお知らせ

—調査統計係—

教育調査の実施については、平素から関係各位のご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

昭和50年度の文部省並びに県の調査事業は下記のことを計画しておりますので、よろしくお祈いします。

記

(県単調査)

1. 学校調査
2. 学校保健調査

(文部省調査)

1. 地方教育行財政調査
2. 社会教育調査—指定統計第83号(未定)
3. 高等学校生徒の希望進路と進路状況に関する調査(未定)

## 教育相談室から

—お知らせ—

お 願 い

本年度10月までの来談状況は下のとおりです。スタッフが増強され、面接延数が大幅にふえました。悩む親に来所をおすすめください。

主訴別受理数・面接延数 49.4.1~49.10.31

知能 学業	言語 障害	神経 症	反社 会性	登校 拒否	夜尿 車酔	進路 適性	他	受理数 合計	面 接 延 数
80	10	37	10	22	24	1	5	189	1047

## ◆ 所員研究発表会についてのお知らせ ◆

昭和49年度所員研究の成果発表会を下記により実施いたしますので、多数の先生がたご参会ください。

期日＝昭和50年2月3日(月)、会場＝当教育センター  
発表領域＝「学年経営(小学校)」、「生徒指導」、「教科(国語科、理科、技術・家庭科)」

## 編集後記

本号は、この秋、センターで行なわれた二つの大会の内容を中心にして作ってみました。秋の實のりを豊かに内蔵した冬がやってきます。各位のご健闘を祈りつつ、小誌をお届けします。

## 教育センターだより 第13号

発行年月日 昭和49年11月19日

編集発行者 秋田県教育センター

秋田市仁井田字潟中島 297 の11